

# マリ・ド・フランスの『レー』にみる英仏 の二重性

ーコンタクト・ゾーンとしてのイングランドー

Political and cultural duality of the *Lais* of Marie de  
France: England and France

横山 安由美

Ayumi YOKOYAMA

マリ・ド・フランス (Marie de France) はフランスで生まれ、  
イングランドで活躍した 12 世紀の女流詩人である。フランス文  
学史とイギリス文学史、それぞれが彼女を「最古の女流詩人」と  
して取り上げるが、フェミニズム的文脈または古典古代の伝統の  
継承者といった側面からの評価が多く、彼女に最も影響を及ぼし  
たであろう歴史的現実、すなわち英仏の二重性という観点からの  
研究はあまり多くない。とりわけケルト起源の多数の驚異的事象  
(merveilleux) を包含する『レー (短詩)』*Lais* は夢幻の恋愛物  
語として扱われがちだ。本稿では同作を 12 世紀における社会状  
況から考察してみたい<sup>1</sup>。

## イングランドにおけるフランス語

初めに言語状況をまとめておこう。1066 年、ノルマンディー  
公ギヨーム 2 世がヘイスティングズの戦いに勝利し、イングラン  
ドでウィリアム 1 世として即位した。このノルマン征服によって、  
イングランド宮廷では英語に代わってノルマンディー方言のフラ  
ンス語が話されることとなった。同じフランス語でも、ノルマン  
ディー方言 (アングロ=ノルマン語、以下 AN 語) とフランス

王家で使われているイル・ド・フランス地方のパリ方言（フランスアン）は区別される。ロスウェルによれば、イングランドではAN語は1250年頃まで政治法律上の公的言語として、14世紀頃までは文化言語として使用され、その後パリ方言に移行していった<sup>2</sup>。ただしいずれもイングランド人にとっては「フランス語」であり、roman（ロマンス語／俗語）や français（フランス語）という表記で表される。14世紀後半には法律や裁判での英語使用が定められ、教育での使用も始まったので、英語の復権はこの時期と見ることができるだろう。ただしフランス語から多くの借用語を受け入れるとともに、音韻体系の変化が激しい時期に正書法が確立されたため、今日に至る「綴りと発音の著しい隔たり」を生じさせることとなった<sup>3</sup>。

中世イングランドにおけるフランス語はいかなるイメージをもっていたのか。AN語で書かれた『教育訓示』*Apprise de Nurture*（写本は13世紀）は父が息子に処世のための助言を行う韻文詩だが、フランス語習得の必要性を説いている。支配階級の言語であるがゆえに必要不可欠とされた。

Jeo voile tot a de primoure Que tu seez sages et pleyn de  
doucour. Seez deboneir et curteise, Et que tu saches bien  
parler fraunceys; Car molt est langage alosé De gentil home  
et mout amé<sup>4</sup>.

私が一番に望むことは、お前が利口で優しさに溢れた人物であることだ。温厚で礼節正しくありなさい。またフランス語をうまく話せるようになりなさい。なぜならそれは高貴な人々にたいへん称えられ、たいへん好まれる言語だからだ。

『聖クレメンズ伝』*Vie de S. Clément*（1200?）では、貴族階級

のみならず、一定身分の者においてフランス語学習が浸透している様子が示されている。

De si escrivre en purpos ai Que clerç e lai qui l'orrunt Bien  
entendre le porrunt, Si si vilains del tut ne seient Que puint  
de rumanz apris n'aient<sup>5</sup> [...]

これを聞くであろう聖職者も俗人もよく理解できるようなかたちで私は書くつもりだ。ただし全くフランス語を学ばなかったほどに卑俗な者たちは別だが。

最も有名なのは、子どもへのフランス語の教授法を語るウォルター・オヴ・ビブスワースの『言語論』*Tretiz* (1240-50 頃) であり、AN 語のテキストの余白や行間には英訳が加えられている。

E quant il encurt a tele age Qu'il prendre se poet a langage,  
En franceis lui devez dire Cum primes deit sun cors descri-  
vre Pur l'ordre aver de "moun" et "ma", "Ton" e "ta", "soun" e  
"ça", "le" e "la", Qu'il en parole seit meuz apris E de nul autre  
escharnis<sup>6</sup>.

〔子どもが〕言葉を話せるような年齢に達したら、まずもって彼の体の呼び方をフランス語で教えてやらねばならない。moun と ma[私の]、ton と ta[君の]、soun と ça[彼の]、le と la[それ] の規則を理解して、うまく話せるようになり、他人に馬鹿にされないようにするためだ。

交易などを通して庶民にもフランス語は浸透した。『狐物語』*Roman de Renard* (1179?) においては、フランス語を話すブルトン人が早くもフランス人側から見た揶揄の対象になってる。ブルトン人の吟遊詩人に化けたルナールが怪しげなフランス語を話

しているからだ。

« Godehelpe, fet il, biau sire! Ne savré rien ton reson dire.—Et  
Diex vos saut, biax doz amis! Dont estes vos? de quel païs?  
Vos n'estes mie nez de France Ne de la nostre connoissance.  
— Non, ma seignor, mes de Bretaing, Si fou tout perdu mon  
gaaing, Tout fu cerchié por ma compaing, Ne trovera rien qui  
m'ensaing. Trestot Franc n'en tot Engleter Avra quis por ma  
compaing quer. Or vodrai torner por rester, Ne sai mes ou  
puisse querer. Tant avré moré cest païs Que j'avré ja tout  
France pris. Mes Paris ira moi ançois, Si avré pris trestout  
françois<sup>7</sup>.

「神助在汝共、私オふらんす語駄目アル」。「お前さんに神のお  
救いがありますように。お前さんどこの者かね、どの国から来  
たのかね。どうやらフランス生まれじゃないようだし、俺たち  
の知ってる国の出でもないようだが」。「ソノトオリデスチャ、  
英<sup>ブルターニュ</sup>国カラ来タヨ。折角ノ稼ギスッカリナクシタアルヨ。ドウ  
シタラエエカ教エテクレル人イロイロ探シタ、誰モイナイ。ふ  
らんす、えげれす、ゼンプ探シタ、駄目。モウ、オラ帰リタイ、  
休ミタイ、オラノ行クトコ何処アルネ。コノ国ニイッパイ暮ラ  
シタ、ふらんすミンナ知ッテル、マズ巴<sup>ぱり</sup>里ニ行く、ふらんす語  
話セルヨウニナリタイアルネ<sup>8</sup>」。

なお英語話者と仏語話者の接触が最も多かったのは14世紀  
あると考えられる。仏語から英語への全借用語のうち32%が14  
世紀に発生しているからだ。1066年のノルマン征服から1150年  
までは意外にも0.3%しかなく、母語としてAN語を使用する王  
侯貴族層と英語を話す一般民衆とは乖離していたが、13世紀以  
降各層での接触が増加してゆく。メルツァーによれば、借用語が

生じる条件は、異なる二言語の話者が接触し、かつ互いを部分的に理解できること、すなわち「部分的2言語併用」partial bilingualism ないし「1.5言語併用」sesquilingualism の場合である<sup>9</sup>。王侯貴族のみならず、商人、聖職者等の英仏間の往来があり、かつまたフランス語が政治文化的に上位にあったために、フランス語から英語への流入が生じた。

イングランドの知識人にとっては、ラテン語、フランス語、英語の三ヶ国語の読み書きが必須であった。ウェールズ人でヘンリー二世（1133-1189）の宮廷に出入りしたウォルター・マップの『宮廷人の閑話』（1182頃）では「ロンドンの現在の司教アルバート・フォリオトはラテン語、フランス語、英語の三ヶ国語に極めて精通した人で、そのいずれの言語でも実にはっきりと話しをし、僅かながらも立派な論文を書き上げ<sup>10</sup>」たと述べられている。

一方王侯貴族はほとんどラテン語ができなかったため、彼らを対象とした物語では俗語が選択された。ただしヘンリー二世は「ガリアの海からヨルダンに至るまでに使われるあらゆる言語の知識を持っていたが、ラテン語とフランス語しか使わなかった<sup>11</sup>」と伝えられ、王侯としては例外的に言語に秀でていた。なお息子のリチャードはAN語しか話せず、AN語で詩作を行ったと伝えられている。

もう一点注意すべきは、イングランドにおけるフランス語は、話者である王侯の社会的ステータスを反映するがゆえに高く評価されたのであって、フランスという国を必ずしも賞賛するものではなかった点である。同じく『宮廷人の閑話』の「シトー修道会の起源について」の章は、イングランドのシャーボーンの四人の修道士が厳しさに耐えかねて逃走し、フランスに渡るが、そこで悪癖を身に着けてしまう話だ。享楽や放縦を意味する「あらゆる災厄の母であるフランス<sup>12</sup>」Franciam omnis malicie matrem という表現があり、こういう「フランス仕込み」こそがシトー修道

会の起源なのだ、と皮肉っぽく語られている。文化的ステータスを構成するのはフランス語であって、フランスではなかった。

## 政治状況

ノルマン征服によって、フランス王家は、ノルマンディー公がイングランド王であるという事実に対応せねばならず、一方イングランド王もノルマンディー公としてはフランス王家に臣従するという多面的な関係性を抱えることとなった。「プランタジェネット家が領有するノルマンディ、メーヌ、トゥーレーヌ、ポワトゥ、ガスコーニュなどの出身者<sup>13</sup>」がイングランド王国の統治を担い、国際色豊かだった。また征服に参加した諸侯に封土が与えられた結果、大陸とイングランド両側に領土を保有するノルマン諸侯がイングランドの政治的エリートとなった。彼らは自己の権益から両地域が統一的に支配されることを希望したため、イングランドという領域的枠組みは曖昧で二次的であった。しかしヘンリー二世の頃からひとつのまとまりとして認識され始め、ジョンがノルマンディーを失う1204年以降、イングランドとしての政治共同体意識が加速化したと考えられる。これは、従来「イングランド人の王」*rex Anglorum*と自称していた王が、ヘンリー二世以降「イングランド王」*rex Anglie*と称し始めたことにも表れており、マグナ・カルタにもその語が用いられている。

またオールドリック・ヴィタルとウィリアム・オヴ・マームズベリの年代記を詳細に辿った有光秀行の研究によれば、*angulus*と*normannus*の語は、元来は民族的な意味合いで「アングロ・サクソン人」と殖民者の「ノルマン人」を表すものとして対立的に用いられたが、徐々に*angulus*はノルマン人をも含んだイングランド居住者を指すようになった<sup>14</sup>。とりわけ聖職者を指す場合に比較的早期から*angulus*の語が用いられた。政治的にはイングランドとノルマンディは一体化していたが、キリスト教上は両管区

は完全に分離しており、イングランドは独立したカンタベリー管区を構成していたからだ<sup>15</sup>。

さて 1154 年にヘンリー二世が即位し、アンジュー帝国と呼ばれる、ブルターニュ、ノルマンディ、アンジュー、アキテーヌを含んだ広大な領土を治下に置いた。イングランドでは内政安定とそれを基盤としたスコットランドやウェールズへの勢力拡大を行ったが、新たに獲得した領土に対しては各領域の統治慣習をそのまま継承した。王の生まれはフランス西部のル・マンであり、父はフランスのアンジュー伯、母マチルダはイングランド王ヘンリー一世の娘であるので、ヘンリーはノルマン人ではないが<sup>16</sup>、ルーアンに頻繁に滞在し<sup>17</sup>、AN 語を日常言語としたと考えられる。「彼は常に旅して、郵便配達人のように耐えられない程長い旅程を移動した<sup>18</sup>」。このヘンリーや妻アリエノール・ダキテーヌの周りには多くの詩人が集まり、12 世紀の AN 文学の興隆を担った。たとえばトマは AN 語で『トリスタン物語』*Roman de Tristan* を書き、ロンドンの町を賞賛をこめて詳細に描写していることから、出自は不詳であるにせよ、イングランドに居住して王族と接点をもったと考えられる。

## マリ・ド・フランスと「フランス」

マリ・ド・フランスは 12 世紀後半の詩人で、ヘンリー二世に謹呈された 12 篇の韻文の『レー』のほかに、アルフレッド大王が編纂した英語版をフランス語に訳したとされる『寓話集』*Fables* も著している<sup>19</sup>。本稿ではメナールらの研究<sup>20</sup>を参照して考察を進めるが、彼女の正体についても諸説あって明確なことはわからない。『寓話集』のエピローグに「私の名はマリ、フランスの出身」*Marie ai num, si sui de France*<sup>21</sup> とあることから、マリ・ド・フランスと呼ばれている。少なくともフランス側で生まれ育った後にイングランドに定住し、イングランドの王侯貴族を対象と

して創作活動を行ったことは確かと考えてよいだろう。「フランス」は、フランス王家帰属という意味でも、もちろん国家的なものでもなく、イル・ド・フランス、つまりパリ地方を指すと考えるのが一般的だ。ただし、パリ地方に生まれたという事実の提示というよりは、イングランドからの視点でもって文化的出自がフランス側であることを誇る意図があったのではないかと考えられる。『レー』の写本はパリ方言のものと AN 語のものが双方が残っているが、序文を含む最も完全な H 写本は AN 語で書かれている。宮廷の王侯を聴衆として、日常言語である AN 語で創作したと考えるのが自然だろう。

同じくイル・ド・フランス生まれでカンタベリーで執筆を行ったガルニエ・ド・ポン＝サント＝マクサンスの『トマス・ベケット伝』*Vie de Saint Thomas* (1174?) においても、語り手は自らの文化資本としてのフランス語を誇っている。

Ci n'a mis un sul mot qui ne seit véritez, Li vers est d'une rime en cinc clauses coplez: Mis languages est buens, car en France fui nez<sup>22</sup>.

ここに真実でない語は一語も入っていない。詩節は同韻の五行節でできている。私の言語は良いものだ、私はフランスの生まれなのだから。

### 『レー』の特徴

『レー』は 1160-1180 年頃の作と考えられ、8 音節の韻文で書かれた 12 作品を含む。タイトルと物語の主な舞台は以下の通りであり、ブルトン人たちの伝承を語り手が語る設定になっている。



タイトル	仏語表記（略称）	舞 台
ギジュマール	Guigemar (G)	Bretagne, Léon の領主の息子
エキタン	Equitan (Eq)	Bretagne, Nantes
とねりこ	Fresne (F)	Bretagne, Dol
狼男	Bisclavret (B)	Bretagne
ランヴァル	Lanval (Lv)	Caerleon (英)
二人の恋人	Deus Amanz (DA)	Normandie, Pîtres
ヨネック	Yonec (Y)	Caerwent (英)
夜鳴き鳥	Laüstic (Ls)	Bretagne, Saint-Malo
ミロン	Milun (M)	South Wales (英) ⇔ Bretagne
不幸な男	Chaitivel (Cht)	Bretagne, Nantes
すいかずら	Chievrefoil (Chv)	South Wales (英) ⇔ Cornwall (英)
エリデュック	Eliduc (EI)	Bretagne ⇔ Exeter (英)

これらの恋愛物語を英仏という観点から見た場合、独自の政治性や社会性が浮き上がってくる。とくに顕著なのが多言語主義と地理的移動である。まず前者から見ていこう。一部のレーでは本文中に複数言語でタイトルが示される。

Gotelef l'apelent Engleis, Chievrefoil le nument Franceis.  
(Chv. 115-116)

イングランド人はそれをゴートリーフ、フランス人はシェーヴルフュー（すいかずら）と呼ぶ<sup>23</sup>。

Ne voil ublier *Bisclavret*; *Bisclavret* ad nun en bretan, *Garwaf* l'apelent li Norman. (B. 2-4)

ブルトン語ではビスクラヴレット、ノルマン人にはガールワーフと呼ばれる、狼男のレーを忘れたくない<sup>24</sup>。

このような多言語表記は AN 語を解さない聴衆のためというよりは、ヴァースの影響を受けたせいではないかとフーレは推測している<sup>25</sup>。ヴァースはノルマンディー育ちの学僧で、ヘンリー二世の庇護を受けて AN 語で年代記の執筆を行ったが、とりわけジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア王列伝』を AN 語化した『ブリュ物語』を執筆したことで名声を博した。マリも『ブリュ物語』を知っていたと考えられ、そこには「ブルトン人たちはそれをブルトン語で〈巨人の円舞〉*carole as gaianz* と呼び、英語では〈ストーンヘンジ〉*Stanhenges* と呼ばれ、フランス語では〈吊り石〉*Pieres pendues* と呼ばれる<sup>26</sup>」といった表記が見られる。ヘンリー二世に仕えた AN 語の作家が共通して複数言語表記に拘ったことを考えると、こうした情報が語学に堪能なヘンリーを喜ばせた可能性も推察できる。

次に地理的移動を考えよう。主要な舞台はフランスのブルターニュ地方からノーサンブリアを北限とするイングランドにかけてであり、海峡の船旅を含む地理的移動が多く描かれる。トマの『トリスタン物語』によれば、英仏間を海で渡るのに「二十昼夜」費やした<sup>27</sup>。一般に中世の人々は戦争や巡礼の目的で多く旅をしたが<sup>28</sup>、『レー』ではその水準を超える頻度で旅が描かれ、とりわけ現実の閉塞感の打破のための意識的な旅立ちであることを特徴とする。

「ミロン」では離別した父子の長旅と偶然の邂逅が描かれるが、父は南ウェールズからノルマンディーに渡りブルターニュへ、息子はノーサンブリアを発ってサウサンプトンから海を渡り、バルフルールからブルターニュに向かい、両者はモン・サン＝ミシエルの騎馬試合で対決する。旅立ちの目的は両者とも名声の獲得であり、とくに父は、同じイングランドで生まれた他の男〔じつは息子〕が大陸で評判をとったことに対して激しい対抗心を燃やしている。「フランスに渡る」ことは、地域的な名声に安住せず、

グローバルな評価を獲得することを意味している。

Milun oï celui loër E les biens de lui recunter. [...] Pur tant cum il peüst errer Ne turneier n'armes porter, Ne deüst nuls del païs nez Estre preisiez ne alosez! D'une chose se purpensa: Hastivement mer passera, Si justera al chevalier Pur lui leidir e empeirier. (M. 341-342, 345-348)

ミロンはこの若者が賞賛され、立派な行ないが噂されるのを耳にした。[...] 自分がいまだ旅に出て、武具を身につけ模擬試合に臨めるかぎりには、同じ土地に生まれたほかの男が、評判をとり名を上げてよいものか。彼は心の中で思いめぐらした。ほかでもない、自分もすぐさま海を渡り、その騎士に手合わせを挑んで、彼を懲らし、その評判を落とすのである。

他方「エリデュック」を見ると、ブルターニュで不遇な扱いを受けた主人公は「主人の愛は所領とは別」と考え、妻を置いてイングランドのエクセターに単身で渡り、十名の部下とともに傭兵として王に仕え、苦労の末に信頼を築く。ただし一年間という期限付き雇用である。彼の「やさしい物腰、さわやかな面ざし、さらに品のよい身のこなし」は王女を引きつけ、二人は恋仲になる。「ああ、どうして私の心は、異国の人の虜になってしまったのだろう。どのような家柄の出であるか知れぬ。そそくさと立ち去られるかも知れぬ」と嘆く王女は、男の流動的な身分を熟知している。このレーは、フランスからイングランドに渡る騎士がフランス風の優雅さを武器に成功する例と捉えることができる。

また移動の対概念が「幽閉」であり、奥方の浮気を心配する領主がしばしば奥方を塔に幽閉する。鳥の姿をした男が囚われの奥方の元を訪れる「ヨネック」では、鳥という驚異的事象が物理的制約から人を解放する。「ギジュマール」では奥方自らが大胆に

塔から脱出し、海に向かう。

男性のみならず、女性の側も強い脱出願望をもつのが『レー』の特徴であり、船や海は自由の象徴として現れる。ケルト神話においては「水辺」は異界の入り口と捉えられており、海、川、池、沼地などにおいて主人公が異次元に迷い込んだり、異界の人物と出会ったりする。『レー』もこの流れを汲み、船や馬などの交通手段による常識的な移動ばかりでなく、超自然的なたちでの移動や変容が描かれる。最も象徴的なのは「ランヴァル」の結末であろう。ランヴァルは、大きな跳躍によって、ままならぬ現世から伝説のアヴァロンへと決定的に去っていく。

Fors de la sale aveient mis Un grant perrun de marbre bis, U  
li pesant humme muntoent, Ki de la curt le rei aloent. Lanval  
esteit muntez desus. Quant la pucele ist fors a l'us, Sur le  
palefrei, detriers li, De plain eslais Lanval sailli! Od li s'en vait  
en Avalun, Ceo nus recuntent li Bretun, En un isle ki mut est  
beaus. (L. 633-643)

宮殿の大広間の外には、黒大理石の大きな踏み台が置かれ、重い甲冑を着た騎士が、宮廷を出発の時は、そこから乗馬したもののだが、ランヴァルはその台に上がり、姫君が扉から外へ出るところを、見事な跳躍を試み、後ろから彼女の馬の背に飛び乗ったのである。ブルトン人の言い伝えによれば、ランヴァルは姫君とアヴァロンの国の、とある大層美しい島に向かい、そこがいたく心になったそうである。

## 恋愛と嫉妬

旅立ちによって従来の恋愛や婚姻関係は破綻し、新しい恋愛関係が発生する。

よそ者である騎士の孤独を共有できるのは、遠方から連れてこ

られ、意に染まぬ結婚を強いられた奥方だけであり、二人が愛し合うのは必然であった。宮廷風騎士道物語の恋愛のほとんどはこの類型に分類される。

「狼男」では、狼男である領主が行方不明になると、妻はさっさと夫を裏切って再婚する。「とねりこ」のクライマックスでは、大司教がヒロインの双子の姉の結婚に対して無効宣言を行う。カトリック教会は1205年のラテラノ公会議で婚姻を秘蹟のひとつと定め、信徒獲得と勢力圏拡大のために積極的に結婚に関与する姿勢を取り始める。一夫一婦制と、秘蹟であるがゆえの離婚不可能が大原則であったが、現実においては結婚の破綻、再婚、事実上の重婚などが頻繁に生じていた。ひとつには十字軍等の軍事活動で生死不明や生き別れになった男女が大量発生したことがある。さらには男女の結びつきというよりも土地や城という財産管理を目的とした複雑な婚姻関係が生じるケースもあり、教会側もそれを黙認していた<sup>29</sup>。マリの『レー』における結婚の不確実性はこうした社会状況の反映であると同時に、後述する土着のポリガミー慣行の表現の可能性も考えられる。

結婚に愛はなく、新しく形成される恋愛関係も障害に満ちている。トリスタンにおける愛は男女の精神的合一と社会の超越がテーマになるが、マリの描く恋愛はそのようなロマンチックな性質は有しておらず、より現実的である。フェランテによれば、カップルの「相互的な委託と協力」mutual commitment and supportが主題であり、愛は心情的な充足では足りず、子どもなどのなんらかの果実を残さねばならない<sup>30</sup>。「ヨネック」では、鳥に変身する騎士と奥方が愛し合うが、奥方の夫が騎士に致命傷を負わせてしまう。後に騎士と奥方の子が生まれ、奥方が子にすべてを明かすことで子が父の復讐を行う。ここでの恋愛は個人の内面的問題ではなく、禁じられていた二者間の結合が実現し、正当化されることへの悲願そのものであり、仮に頓挫した場合は子の世代に

回復が託される。

そもそも遠隔地への移動が定住に至るためには、新しい領主への継続的な奉仕による生計手段や土地の確保とともに、異性との出会いによる子孫の形成が不可欠である。当時イングランドでは相続関連の法制度は整備途上にあったが、こと異邦人にかんしては要件が厳しく、相続が禁止される場合が多かった。だが、ノルマン征服以来の大量の人的移動を通して不可避免的に通婚は進み、13世紀初頭から封土の相続が法的にも保証されてゆく。そう考えた場合、『レー』の製作された12世紀後半の過渡期的なイングランドは、異邦人にとっては厳しい現実そのものであり、彼らの愛も、あるいは命それ自体も、露のごときものだった。

もし恋愛が果実を残しえず、悲劇に終わった場合はどのように処理されるのだろうか。「夜鳴き鶯」では、逢瀬の仲立ちをした夜鳴き鶯が奥方の夫によって殺されると、騎士は鳥の死骸を高価な箱に納めて封印させると、つねに身近く持ち運んだ。愛を記念する物体を聖遺物的に保存し、記憶それ自体に形体を与えたのだ。「二人の恋人」では、共に非業の死を遂げた二人を山頂に葬ることで、「二人の恋人の山」と名づけられた山が永遠にその愛と死を証することとなった。あるいはまた、多くのレーに見られるように、当該の出来事が「語り継がれ」、さらにはそれがマリによって文字化されること自体が、愛の保存と物質化として機能したと言える。登場人物たちの愛は奇跡的な巡り合いによって生まれ、つかの間の輝きを放ったが、その儚さと貴さゆえに、語り手をして「忘れ去られてゆくのがしのびない」（序文）と言わしめるのだった。

なお恋愛には嫉妬が付きものであり、しばしばそれが愛を崩壊させるのだが、『レー』においては若妻を幽閉する夫<sup>31</sup>のような典型的な類型のほか、男女関係以外での嫉妬も多出する。騎士の資質にかんする男どうしの嫉妬や中傷が渦巻き、愛顧が転じて憎しみと化す領主と騎士の関係も少なくない。とくに勇猛であるが

ゆえに嫉妬されて社会的に孤立する騎士像が顕著である。そして、「エリデュック」が示すように「旅」と「妬み」が連鎖反応を引き起こすことでストーリーが展開する。他者からの妬みは旅立ちの原因になると共に、旅立った先でも更なる妬みを蒙る結果になるからだ。

## 騎士、諸侯、王

この流れから改めて騎士や諸侯について考えてみたい。イングランドは元来分割相続の伝統を有していたが、ヘンリー二世の代から長子相続が定着し始めた。諸侯 baron に関しては、英仏両側に領土をもつ一家の場合、長子がノルマンディー側を相続し、次男は一応イングランド側の相続が可能だったと言われるが、男子がいない場合などがあり、ノルマン征服直後のような、成り上がりや大量の所領確保は難しくなっていく。ますます諸侯は国王への忠勤に務めるとともに、富裕な女子相続人との結婚を求めるようになった。また富沢霊岸によれば、ヘンリー二世自身が「貴族領の女子相続人や未亡人を調査し、その結婚、再婚を支配して、良い結婚を餌に人々に忠誠を誓わせようと」した<sup>32</sup>。北フランスでは、自己の権益強化のために境界を越えた婚姻政策を推し進めた結果、ノルマンディー公（英王）と仏王に二重に臣従（オマーージュ）を行う諸侯も多くあった。以下はその一覧であり、彼らはジョン王のノルマンディー公領喪失以降、英王と仏王のいずれかを選択することとなる<sup>33</sup>。

ましてや諸侯に仕える一般の騎士たちの流動性や不安定性はさらに大きかったことだろう。各地を移動して理想的な領主を探し求めたばかりでなく、諸侯自身も新たな貴族層を創出するための人材の移住を奨励した。

古来、騎士道物語の「主人公＝英雄」héros は王家の血を引く長子において体现されていたが、マリは相続に外れた次男、三男

英仏両王に臣従した諸侯
<p>1. 1204 年以降英王を選択  Arundel (Earl of), Auffai, Aumâle, Bohun (Bohn and Carentan), Briouze, Chester (Earl of), Clare (Earl of), Cleville (Le Hommet), Colombières, Gloucester (Earl of), Gournai, Gravenchon (Evreux), La Haie-du-Puits, Leicester (Earl of) (Breteuil and Grandmésnil), Littehaire (Orval), Meulan, Montbrai, Montfort (Coquainvilliers), Montpinçon, Mortain, Mortemer (Warene), Moutier-Hubert (Paynell), Moyon, Négreville (Wake), Nonant, Ollonde (Mandeville), Sai, Saint-Jean-le-Thomas, Saint-Victor-en-Caux (Mortemer), Tosny, Tracy (Oliver and William), Troisgots</p>
<p>2. 1204 年以降仏王を選択  L'Aigle, Alençon (Sées), Argences (Richard of) (Evreux), Aunou, Baqueville (Martel), Beau fou, Bricquebec (Bertram), Cailly (Baudemont, Longchamp), Courci, Creully, Esneval, Eu (Exoudum), Ferrières [Ferrers], Fontenai (Marmion), Fontenai (Richard of), Fougères (William of), Gace, Gisors, Graille (Malet), Hambye (Paynell), Harcourt, Le Hommet, Mortemer (William of), Néhou (Vernon), Neubourg, Pavilly, Préaux, Roumare, Saint-Hilaire, Saint-Sauveur (Tesson, Thury), Tillières, Tournebu, Tracy (Turgil of), Vassy, Vieuxpont</p>

を積極的に物語の主人公として取り上げる。彼らは他国の領主に臣従して生計を立てざるをえず、「傭兵」soudoier となる。血縁上の保護から断ち切られ、独力での社会的上昇を強いられる苦しい立場であり、彼らこそが騎士道物語の主人公であることはフラビエの論文が示すとおりである<sup>34</sup>。またデュビーによれば、若い騎士と高貴な女性との恋愛は、女性への憧憬と崇拜を前面に出した女性尊重のモチーフなどではなく、むしろ下級騎士たちの宮廷共同体への文化的参入と階級上昇幻想の表現であった。

Asez i duna riches duns E as cuntes e as baruns. A ceus de la Table Roûnde—N'ot tant de teus en tut le monde—Femmes e teres departi, Fors a un sul ki l'ot servi: Ceo fu Lanval; ne l'en sovint Ne nuls des soens bien ne li tint. Pur sa valur, pur sa largesce, Pur sa beauté, pur sa pruësce, L'en-vïoent tuit li plusur; Tels li mustra semblant d'amur, S'al chevalier mesavenist, Ja une feiz ne l'en plainsist! Fiz a rei fu, de



haut parage, Mes luin ert de sun heritage! De la meisniee le rei [=Arthur] fu (Lv. 13-29)

なみいる伯や領主たちや、とりわけこの世に較べる者のない、かの円卓の騎士の面々に、〔アーサー〕王はたくさんの贈り物をほどこし、妻をめあわせ領地をあてがった。しかし、王に仕えるなかでも一人、ランヴァルのみは思し召しにあずからず、彼のために弁じる者もなかった。実に、その人徳と豪気と、また美貌と勲功のゆえに、彼は大勢の者からねたまれていた。かつて友誼を示した者も、ひとたび彼に不運が訪れると、同情の言葉すらかけなかったに違いない。ランヴァルは高貴な家柄の王家に生まれた。しかし、継承の順にはずれ、アーサー王の扈從の騎士となった。

継承の順にはずれたランヴァルは傭兵の典型的存在であるが、奉仕先でも人一倍苦勞する。王に評価されればされるほど同輩からは憎まれ、かといって王から嫌われれば誰ひとり寄り付かず、結果として常に孤独である。

軍事史的に見た場合、ヘンリー二世は、ブラバントやガスコーニュなどの傭兵の大規模な利用を行っている<sup>35</sup>。封臣による軍事奉仕は40日を上限とするという慣習のために遠隔地や長期の奉仕には利用できず、また頻発する身内の反乱を平定するにあたって彼らの忠誠心は当てにならなかったためである。このような傭兵依存型の統治体制を宮廷に出入りしたマリも熟知していたはずだ。

彼女が描く「王」のイメージも独自のものである。しばしば王は否定的に描かれ、傲慢で、不公平で、臣下の妻と寝るなどといったモラルの欠如を示す。かの「アーサー王」もまた、ランヴァル一人を差別したり、王妃の姦計にだまされる愚か者として描かれている。それは、絶対的な権力と人徳を併せ持つ王が未だいないイングランドの現実感の反映にほかならないだろう。しかも円卓

の騎士たちに妻を娶わせ、土地をあてがったという記述はヘンリー二世を連想させる。

『寓話集』もまた、動物に仮託してはいるものの、鳩や鳥、まさに烏合の衆の「王探し」や、残忍で臣下を食い物にする王のテーマを頻繁に取り上げる。「蛙の王探し」では、神が王として与えた丸太を蛙たちが侮蔑したので、今度はヘビを与えたところヘビに食べられてしまった、という内容で、「人はしばしば温厚で善良な君主を侮蔑し、刺激的な王を求めるものだ」という戒めがついている。「王になった狼」という寓話では、王であるライオン自身がよそで暮らしたいと言って旅立ってしまう。そこで悪賢い狼が即位し、臣下を食ってしまうという悲惨な結末になるのだが、「王の不在」や「王探し」や「不適切な王」という主題も極めて時代的なテーマである。

D'un leon dit que volt aler En autre tere converser. Tutes les bestes assembla E tut sun estre lur mustra E qu'il deüssent rei choisir; Kar ne quidot mes revenir. (*Fables* 29, 1-6)

ライオン〔王〕は旅立って他国で暮らしたいと思い、全ての獣を集めて意向を伝え、彼らが新しい王を選ばねばならぬと言った。戻るつもりはなかったからだ。〔→狐が即位〕

Pur ceo mustre li sage bien Que hum ne deüst pur nule rien Felun hume fere seignur Ne trere lë a nul honur: Je ne garadera leauté Plus a l'estrangle que al privé; (115-120)

だから賢者はよく言ったものだ。人は絶対に狡猾な者を君主にしたり、彼に榮譽を払ったりしてはならない。そういう者はよそ者ばかりでなく親しい者に対しても誠実さを欠くことだろう。

ノルマン征服以降のイングランド王は、公的国家の頭としての

国王 (rex) と、私的人的封建関係の頂点である封建領主 (dominus) の二側面を有していたが、12 世紀までは後者の側面が際立っていた<sup>36</sup>。当時のヨーロッパでは地域国家の領有権は相続や結婚を通じて継承されたが、王国の相続慣習が確立していなかったことから継承は頻繁に紛争を生ぜしめた。「そのような状況では、王国を誰が継承するかは、最も重要な政治問題だったといつてよい。行政機構の未発達なこの時代、国の安定は、人間としての王の力量に直結していたからである<sup>37</sup>」。

### 異邦人の意味と周縁性

上記の引用の最終行では、「よそ者」estrane と「親しい者」privé という集合名詞が対比的に使われている。estrane の語は当該人物が異国の出身者である場合のみならず、発話者にとって異質である場合すべてを包含する、広い概念である<sup>38</sup>。人は集団の中で中核にいるか周縁にいるかで二分され、王は本来前者を愛し、引き立てることによって集団を堅固にする機能を有する。疎外されたよそ者は中核に加わろうとして必死に忠誠を誓うからだ。格差は社会にとっての必要悪である。しかし当時のイングランドでは、出身地にせよ、言語にせよ、血縁にせよ、よそ者と親しい者を分かつ基準が不明瞭で複雑であり、頂点に立つ王の恣意性や資質に強く左右される。この脆弱な社会構造がもつ根源的なフラストレーションこそが、マリのレーの推進力であると考えることができないだろうか。

Seignurs, ne vus esmerveillez: Hum estrane descunseillez,  
Mut est dolenz en autre tere, Quant il ne seit u sucurs quere!  
(Lv. 35-38)

皆さま、驚かれてはならぬ。寄るべのない他国の者は、異境の地で活計<sup>たつき</sup>を失えば、こうして大層悲嘆にくれるのである。

言い方を変えれば、実は、騎士も奥方も王も皆すべてが何らかの異質性を含みもち、社会において疎外されていた。同じく AN 語の作家でヘンリー二世の宮廷に出入りしたトマの『トリスタン物語』においても異邦人の孤独が強調されている。

《Lasse, caitive! Grant dolz est que jo tant sui vive, Car unques nen oi se mal nun En ceste estrange regiun. Tristran, vostre cors maldit seit! Par vus sui jo en cest destreit! Vus m'amenastes el país, En peine jo ai esté tuz dis; [...] Si vus me guerpisez ici En terre estrange, senz ami, Que frai donc? Comment viverai<sup>39</sup>?》

「不幸な、哀れな私！こうして生きているのが何と辛いことか、寄る辺のないこの異国で、我が身に起きることは不幸せばかり。トリスタン、あなたは呪われるがよい！あなたのためにこの窮地に追い込まれた。あなたが私をこの国に連れて来て、それ以来ずっと私は苦しみ放し。[...] 友ひとりいない、異国のこのようなところでそなたに見放されたら、ブランガン、どうしたらよい？どう生きたらよい？<sup>40</sup>」

真の愛はすべてを超越するのかと思いきや、イズーは自分をアイルランドから連れてきたトリスタンを心底から呪っている。同郷の乳母ブランガンだけが頼みの綱であり、現在居住しているコーンウォールを終始「異国」と呼び続ける。一世代のみでは、意識上の同化が困難である現実を表している。

一方、登場人物たちが意識的に旅立ち、好んで異邦人となるという点ではマリーとトマは対照的である。「ミロン」の息子は「このようにして生を享け、父がこれほど讃えられるのに、息子が故郷の土地も離れず、父を凌ぐ武勲を上げなければ、さぞかし人から蔑まれよう」と語って遠方へと旅立つ。郷里に安住するのでは

なく、自分の血統に対する他者の視線を介在させることによって旅立ちを自ら動機付けてゆくのだ。

人は移動によって従来のアイデンティティーを喪失し、再構築してゆく。その極端な例は鳥や狼への変身である。とくに『レー』に頻出する「鳥」のモチーフは、家屋や塔といった構造物、すなわち社会そのものを超える新生の契機として効果的に用いられている。マリ以外の作者の手になる無名のレーも残存し<sup>41</sup>、同じくケルト風の驚異的モチーフを包含するが、社会やアイデンティティーとの関連づけは乏しい。

さて、多数の人が当該集団のなかで周縁的であるということは、その地域自体が中央（Ex. 大陸）と比べて周縁的な地域であるとみなすこともできよう。一部の物語の舞台である南ウェールズを例に挙げて考えてみよう。ここはノルマン王朝の勢力と従来のケルト的土壌のちょうどコンタクト・ゾーン（接触点）であり、たとえばカーリオンは11世紀後半のドゥームズデイ・ブックでは王朝の境界に位置している。

親族集団単位で分断され、政治的、軍事的に脆弱だったウェールズは、強力な騎馬隊を有するノルマン人に征服されたのだが、その過程で大陸型の法制化された合理的な封建制度が半遊牧的で分散的な土地柄を侵食していった。宗教面においても同様で、11世紀のグレゴリウス改革によってカトリック教会は、外婚制の推進や結婚の非解消性を唱えてきたが、一方ウェールズには近親婚、離婚、嫡出子と私生児の同等の相続権などの慣行があった。教皇特使制度、教会会議などの制度改革によって教皇がヨーロッパに対してグローバルな権力を行使し始めるのは12世紀以降のことであり、『レー』の時代ははまだ中央と土着の両勢力がせめぎあっていた。キノシタは論文「植民地的占有 マリ・ド・フランス『レー』におけるウェールズとアングロ＝ノルマン像」において、ノルマンによる植民地化の前線として『レー』の舞台を捉えてい

る<sup>42</sup>。「ミロン」の奥方は未婚で出産し、事実上重婚しており、「ヨネック」では奥方の不義の子が後継者として普通に育てられている。これらはカトリック的にはありえない状況であり、ウェールズの古い社会慣行に拠ると考えられる。

しかしそれは、最終的に主人公たちが新しい理想主義的な社会を築いてゆく契機として機能した。新しい社会とは、親族集団を無効化し、個人の實力主義 meritocracy を認める世界である。つまりマリの『レー』は、たんなるノルマン文化への同化やノルマン文化の忌避ではなく、ローカルな価値を保持しつつ、より高い理想に向けた変化を自ら選び取る可能性を描くものだった。例えばミロン親子はどちらも遠いフランスに渡ってグローバルな名声を求めたが、その結果両者が得たのは騎士としての名声ばかりでなくて、親子の邂逅と、子にとっての実の父母の結婚（母は再婚）、すなわち「家族」であったことは意義深い。

### 普遍幻想とコンタクト・ゾーン

クレチアン・ド・トロワは『クリジェス』*Cligès* 序文で次のような「遷移」translatio に言及している。

Que Grece ot de chevalerie Le premier los et de clergie, Puis vint chevalerie a Rome Et de la clergie la somme, Qui or est en France venue. Dex doit qu'ele i soit retenue Tant que li leus li embelisse Si que ja mais de France n'isse L'ennors qui s'i est arestee<sup>43</sup>.

騎士道と学問の道の最初の誉れはギリシャにあった。ついで、その騎士道と学問の道全体がローマに行き、そして今、フランスに來た。その道が定着し、当地が居心地よいものとなりますよう、名誉が決してフランスを出ることなく留まりますよう、神がお計らいくださいますように。

帝国や文明を普遍的かつ絶対的なものとみなし、現在を偉大な過去の後継者と位置づける発想は中世独自のものである。三段階の「三」は三位一体に由来する完結性を表す数字だが、現在を最良にして最後ととらえる「普遍幻想」は楽観的であると同時に悲観的である。クレチアンはその文明が「フランスから出て行かない」よう願っているが、それでは地理的に更に先のイングランドはどのような位置づけになるのだろうか。

『ブリタニア王列伝』や『ブリュ物語』では、アーサーはイングランド統一後にフランス、そしてローマに進軍して勝利を収める。それは逆向きでの普遍的權威の克服であると言えるし、また直接的にはかつてローマの属国であった過去の回収でもあった。しかしながら勝利直後に祖国でのモードレッドの裏切りが発覚し、帰郷した王が死亡することを考えると、イングランドによる普遍的権力の獲得は夢であり幻影であったと感じさせられる。

12世紀のイングランドというのは、法制度にせよキリスト教にせよ、大陸から北上してきた、「普遍」を称する合理的で画一的な波と、一方でローカルの伝統的な文化や慣習がせめぎあう摩擦地帯であった。宗教を例に出すならば、ローマ教会の一部として普遍的聖人を称えつつも、地方的な聖人崇拜も復活させている。それを「新米のイングランド人」rudis Anglusと呼ばれたイタリア出身のランフランク스가まとめ上げ、カンタベリー大司教区座を中心にブリテン諸島でのヒエラルキー確立を目指した。しかしながら、単純な大陸（普遍）対ブリテン島（個）の葛藤と見るのは早計であり、イングランドの政治的、宗教的リーダーは個々に大陸と接点をもっていた。山代宏道によれば、すべては彼らの大陸で得た経験に左右される。すなわち「中世における新しい情報伝達と教会改革運動の拡大は、人の移動に依存していたのである<sup>44</sup>」。

政治的に見ても、当時のイングランドは、領域的な主権国家で

はなく、人的結合を基調とする封建領主制の寄せ集めにすぎず、それぞれが独自の慣習と統治機構を有していた<sup>45</sup>。共同体概念が曖昧なのだから、共同体帰属が人々の身の保障や安心をもたらすこともなく、たとえ宮廷に出入りする者であっても個として独立し、自衛し、自活せねばならない。ウォルター・マップは、宮廷をしばらく離れてから戻ってくると、私と「宮廷とは互いに見知らぬ異邦人となる<sup>46</sup>」と述べ、宮廷人一人ひとりが本質的に疎外されていることを述懐している。共同体幻想に巻き込まれにくいイングランド宮廷においては、異質な者たちとの日常的な葛藤のなかで主体的な現実感と生存の美学とが根を下ろした。

イングランドが、あるいはイングランドの特定の領域が、大陸からの発展の「境界」border だったというよりは、「移動する人々」に拠って立ったイングランドそのものが、異質の諸文化がぶつかりあう社会的空間としての「コンタクト・ゾーン」であったのであり、そのことが後世の文化的発展を特徴づけていったのではないだろうか。

## 円卓と語ること

さて、ノルマン征服を契機に大陸から渡ったノルマン人は、イングランドにおける自分たちの輝かしい過去の歴史を書き始めた。現在と過去の継続性を可視化し、王家の正統性を主張する目的をもったこれらの歴史書は「祖先のロマンス」ancestral romance と呼ばれる<sup>47</sup>。デーヴィスはノルマン人の民族的アイデンティティーは彼らの共通の経験と伝承に依拠しており、「ノルマン人神話」が失われたときノルマン民族も消滅するだろう、ととらえている<sup>48</sup>。

前述のヴァースは『ブリュ物語』のほか、ノルマンディー公ロロ（846 頃—933）の物語にも着手したのだが、ヘンリー二世がブノワ・ド・サント＝モール<sup>49</sup>にも同内容の執筆を頼んだと聞い



て中断してしまう。王侯の愛顧を巡って作家どうしの対立があったことや、著者は題材によって自らの固有性をアピールしていたことが伺える。マリもまた、序文冒頭で自分固有の題材とは何かを熟考している。

なにかよい物語を、ラテン語からフランス語に訳して綴ってみたらどうだろう。しかし、多くの人が試みていますから、もはや甲斐のないことかもしれません。

Pur ceo començai a penser D'aukune bone estoire faire E de latin en romaunz traire; (Prol. 28-30)

自己を差異化するために選んだのがブルトン人たちの伝承だった。それはなぜだろうか。上述の *angulus* と *normannus* の対比を思い出してみよう。侵入者のサクソン人にせよ、征服者のノルマン人にせよ、イングランドの大地にとってはよそ者にすぎない。古来から居住したブルトン人こそ、語るに値する真正な題材である。厳密に言うと、ブルトン人を語るのではなく、ブルトン人の語る意思、あるいは語られる意思をこそ、語らねばならない。「エキタン」序文では、こう書かれている。

Mut unt esté noble barun Cil de Bretaine, li Bretun! Jadis suleient par pruësce, Par curteisie e par noblesce, Des aventures qu'il oient, Ki a plusurs genz aveneient, Fere les lais pur remembrance, Qu'um nes meist en ubliance. (E. 1-8)

ブルターニュ<sup>50</sup>のブルトン人の貴族は、いかにも気高い人々であった。彼らはその昔、武勲と雅びと心ばえとを重んじ、多くの人の身の上に生じた、冒険の物語を耳にすると、忘れ去られてしまわぬよう、記憶のよすがにレーを作った。そのひとつは、私も聞いたことがある。

ブルトン人の卓越性や、題材が「多くの人」の経験であるという言及を見ていると、逆にノルマンの年代記なるものの不自然さが浮かび上がってくる。それは、王侯のご機嫌とりを目的とした、一部の人々（王族）のみを題材とした虚構だった。『レー』において、物語は「真実」であるとしきりに主張するマリは、どちらがより真実なのかを世間に問いかけていたのではないだろうか。もちろんのこと、「歴史書は真実であり、驚異的な物語は虚構である」といった今日的な二元論は成立しない。そもそも中世はジャンルという概念に乏しかったし、歴史書もまた奇跡譚や遠い伝聞を含んだ虚構性の色濃いものだった。違いがあるとすれば、それが著しく政治的であるか否か、だけだった。一般的に中世の物語に出てくる「真実」は、諸相があるにせよ、神の意図に即した宗教的真実である場合が多いが<sup>51</sup>、マリの主張する「真実」は、社会的人間の有する普遍的特質であったと同時に、ライバルたちの著作の虚構性を念頭においた相対的なものであったかもしれない。

ところで騎士たちに優劣をつけないためにアーサー王が設立したとされる「円卓」はジェフリーの『列王史』にはなく、ヴァースの『ブリュ物語』が初出であるため、ヴァースの発案だと考えられる。

Fist Arthur la Roünde Table Dunt Bretun dient mainte fable.  
 Illuec seeient li vassal Tuit chevalment e tuit egal; [...] N'esteit  
 pas tenuz pur curteis Escot ne Bretun ne Franceis, Normant,  
 Angevin ne Flamenc Ne Burguinun ne Loherenc, De ki que il  
tenist sun feu, Des occident jesqu'a Muntgeu, Ki a la curt Ar-  
 thur n'alout E ki od lui ne sujernout [...] <sup>52</sup> ;

〔アーサー〕王はブリトン人〔＝ブルトン人〕たちの間で言い  
 伝えのある円いテーブルを作らせた。そこに座る騎士たちは王  
 の側近騎士で、みな平等であった。[...] スコットランド人、

ブリトン人、フランク人であり、ノルマン人、アンジュー人、フラマン人であれ、ブルゴーニュ人、ロレーヌ人であれ、西の世界からモンジューまでの、誰から封土を享けている者であれ、アーサー王の宮廷に行って王とともに滞在しない者は「...」決して優雅とは見なされない<sup>53</sup>。

円卓はブルトン人の伝えたものとされ、彼らが平等な理想社会の担い手であったかのように感じさせられる。王が騎士たちを平等に扱うという発想の裏には、現世の王の不公平さに対する認識と改善の願望があったのだろうか。また他の領主に臣従する者もアーサーに仕えうるという二重臣従の示唆は、アーサーの寛大さのアピール以上の現実的な含意があるようにも感じられる。

実際ヘンリー二世の宮廷は、ウォルター・マップが「地獄」と比較するほどに魑魅魍魎が跋扈していた。妻子に裏切られ続けた王は、教養人であつたがゆえに、子孫や臣下といった「人」に期待する代わりに過去の歴史の創出に惑溺していったのかもしれない。

[...] unde in nobis eorum viuit memoria, et nos nostri sumus immemores. Miraculum illustre! mortui viuunt, viui pro eis sepeliuntur! Habent et nostra tempora forsitan aliquid Sophoclis non indignum coturno. Iacent tamen egregia modernorum nobilium, et attolluntur fimbrie vetustatis abiecte. Hoc nimirum inde est, quod reprehendere scimus, et scribere ignoramus; [...] Sic raritatem poetarum faciunt gemine lingue obtractorum. Sic torpescunt animi, depereunt ingenia; (*De nugis* 5-i)

こうして、彼ら〔＝古代人〕の記憶がわれわれの中に生きて、われわれは自らを忘れさる。注目すべき摩訶不思議！死者たちが生きて、生きた人たちが死者にとって代わり埋葬される！現

代も恐らくソボクレスの悲劇に匹敵しなくはない何かを提供しよう。しかし、現代の優れた人びとの偉業は等閑にされて、昔の見捨てられた末梢的なものが称揚されている。これはたしかに、われわれは批判することは知っていても、書くことを知らないからである。[...] こうして、中傷者たちの二枚舌が詩人の払底を惹き起こしている。こうして、精神は鈍磨して、想像力は枯渇する<sup>54</sup>。

「死者が生きて、生者が埋葬されている」とは、架空の過去の人物たちと、それを描く偽文士たちが存在感を示し、真の才人が埋没している現状を言う。次に引くマリの序文は見事にこれと呼応している。

Ki de bone mateire traite, Mult li peise si bien n'est faite. Oëz, seignurs, ke dit Marie, Ki en sun tens pas ne s'oblie. Celui deivent la gent loër Ki en bien fait de sei parler. Mais quant il ad en un païs Hummë u femme de grant pris, Cil ki de sun bien unt envie Sovent en dient vileinie: Sun pris li volent abeissier; Pur ceo comencent le mestier Del malveis chien coart, felun, Ki mort la gent par traïsun. Nel voil mie pur ceo leissier, Si gangleür u losengier Le me volent a mal turner: Ceo est lur dreit de mesparler! (G. 1-18)

よい題材を取り扱っても、うまく物語りできなければ、心苦しいことであるが、世にあるかぎり務めを怠らぬ、私マリーの語るところをお聞き下さるよう。人々の口の端にのぼり評判をとる人は、賞讃を集めてしかるべきだが、たとえば男でも女でもよい、ある国に名声を博する人物がいる時には、その才能をうらやむ者たちが、しきりと卑劣な中傷をおこない、その名声をおとしめようとする。そして、裏切って主人に咬みつく卑怯で

悪賢い性悪の犬のごとき、なりわいを事とするものだ。しかし、私は仕事を怠りはすまい。嫉妬深く口の悪い者たちが、私の仕事に難癖をつけようとしても、悪口をいうのは彼らの勝手なのだ。

マリの言う「よい題材」は真実を語るブルトンの物語であろう。「男でも女でも」といった口調から、自分の文才に対する妬みの激しさが伝わってくる。実際に同時代のドニ・ピラームスは『聖エドモンド王伝』*Vie de seint Edmund le rei*(1180)の中でマリの成功を妬ましげに語っている。

E dame Marie autresi, Ki en rime fist e basti E compassa les vers de lais Ke ne sunt pas del tut verais; E si en est ele mult loee E la rime par tut amee, Kar mult l'aiment, si l'unt mult cher Cunte, barun et chivaler; E si en aiment mult l'escrit E lire le funt, si unt delit, E si les funt sovent retreire. Les lais solent as dames pleire: De joie les oient e de gré, Qu'il sunt sulum lur volenté<sup>55</sup>.

そしてマリ殿も同じように、いささかも真実ではない、レーの詩句を整えて、韻文の形に書き上げた。彼女は大変賞賛を博し、その韻律も好まれている。伯も領主も騎士の面々も、これをいたく愛好し、その文章に惚れこんで、しきりと物語りさせ、朗読させては喜んでいる。レーはご婦人方のお気に召した。ご婦人方は楽しみ喜んで耳を傾けるが、というのもレーが心になっているからだ<sup>56</sup>。

ドニは「婦女子受け」という侮蔑的な表現を用いてマリの人気を矮小化し、暗黙裡に彼女の女性性を批判している。「いささかも真実ではない」は、驚異的な題材が非現実的であるという意味のほか、政治に資するような歴史書と質的に異なることをあてこ

すっているのだろう。マリがあえてラテン語の年代記ものの翻訳を避けていること、ノルマン人の歴史ではなく、より古い伝説的過去を想起させるブルトン人のレーの採録に拘ったこと、アーサー王を最良の激しい不公平な王として書いていること、勇猛なランヴァルを最後にアーサーの宮廷からアヴァロンという異界に行かせてしまったこと——これらは実は『ブリュ物語』で成功を収めたヴァースやその他の年代記作家たちへのライバル意識に基づくものであったと考ええると、納得がいくのではないだろうか。

過去の歴史を書く者は王に媚びへつらう俗物であることを暗黙のうちに批判しつつ、マリは等身大の人々を描き、「国」や「血統」という虚構から離脱する。『レー』の本質が、その「異邦人たち」が定着して作り出す新たな生の可能性であるとするならば、マリは過去ではなくて、現在を、さらには未来を描いた、と言えるだろう。キリスト教では、天との対比から、人は本来的にすべて「さまよえる者」*peregrini* であった。

イングランドとは、中央で経験を得た者が、ローカルになるべく、学ぶ場であった。ローカルであって初めて、人は個としての意味をもつ。文学とはコンタクト・ゾーンでの社会的遊戯に他ならないことを、マリは知っていたのではないだろうか。

---

## 【注】

- 1 本稿は、日本英文学会大会シンポジウムでの口頭発表「Marie de France における「境界」としてのイングランド—12世紀の歴史状況からみる恋愛物語—」（2015年5月23日）を加筆訂正したものである。発表の機会を下さった日本英文学会、とりわけ松田隆美先生にお礼を申し上げたい。また本研究は2014年度フェリス女学院大学共同研究「宗教・芸術の表現形式及び伝承に関する研究」（研究代表者：藤本朝巳先生）の一環として調査・研究を行ったことを報告させていただく。
- 2 Rothwell, William, « The Role of French in Thirteenth-Century En-

- 
- gland », *Bulletin of the John Rylands University Library of Manchester* 58-2, 1976, p. 456.
- 3 田中克彦／H. ハールマン『現代ヨーロッパの言語』岩波新書, 1985, p. 101.
  - 4 Spencer, Frederic, « L'Apprise de nurture », *Modern Language Notes* 2, 1889, p. 102 (Ms. Douce 210).
  - 5 Rothwell, *op. cit.*, p. 451.
  - 6 *The Treatise of Walter of Bibbesworth*, éd. Dalby, Prospect Books, 2012, ll. 21-28.
  - 7 *Roman de Renart I*, éd. Fukumoto et alii, France Tosho, 1983, vv. 8009-8026.
  - 8 鈴木覚, 福本直之, 原野昇訳『狐物語』岩波文庫, 2002, pp. 158-159.
  - 9 Melzer, *op. cit.*, pp. 4-5.(英語中の仏語借用語の世紀別割合は, 1150 年まで: 0.3%, 1200 年まで: 03.%, 13 世紀: 17.6%, 14 世紀: 31.8%, 15 世紀: 15.7%, 16 世紀: 14.6%となる)
  - 10 ウォルター・マップ『宮廷人の閑話 中世ラテン奇譚集』瀬谷幸男訳, 論創社, 2014, p. 32.
  - 11 同上, p. 399.
  - 12 同上, p. 62; Walter Map, *De nugis curialium*, James, M.R. (éd.), Clarendon Press, 1914, 1-xxiii.
  - 13 浅治啓三他編『中世英仏関係史 1066-1500』創元社, 2012, p. 2.
  - 14 有光秀行「二人の年代記作者はイングランドとノルマンディをいかにとらえたか: オルドリク・ヴィタルとウィリアム・オヴ・マームズベリの場合」『史學雑誌』100, 1991, pp. 74-99.
  - 15 Mackay, Angus/Ditchburn, David, *Atlas of Medieval Europe*, Routledge, 1997, p. 120.
  - 16 アンジュー伯は代々ノルマンディー公とは対立する立場にあったが, 父ジョフロワ四世は 1144 年に武力でノルマンディー公領を獲得し, ヘンリーは 1150 年にこれを受け継いだ.
  - 17 当時の宮廷は移動宮廷で所在が一定しなかったうえ, 軍事活動や親族・姻戚との複雑な対立関係を抱えていたヘンリーは頻繁に移動を行った.
  - 18 ウォルター・マップ 上掲書, p. 399.
  - 19 『聖パトリックの煉獄』*L'Espurgatoire de saint Patrice* がマリの手になるかどうかは不明である.
  - 20 Ménard, Philippe, *Les lais de Marie de France*, PUF, 1979; Hœpffner, Ernest, *Les lais de Marie de France*, Nizet, 1971.

- 
- 21 Marie de France, *Les Fables*, Brucker, Charles (éd.), Peeters, 1998, Ep. v. 4.
- 22 Antoine Le Roux De Lincy, *La vie et la mort de saint Thomas de Cantorbéry, par Garnier de Pont-Sainte-Maxence*, Bibliothèque de l'école des chartes 4, 1843, p. 210.
- 23 筆者訳.
- 24 『十二の恋の物語 マリー・ド・フランスのレー』月村辰雄訳. 本稿での『レー』の引用は断りのない限り月村訳を使用させていただく.
- 25 Foulet, Lucien, "English words in the Lais of Marie de France", *Modern Language Notes* 20, 1905, pp. 109-111.
- 26 Wace, *Roman de Brut I*, Arnold (éd.), SATF, 1938, vv. 8175-78.
- 27 新倉俊一他訳『フランス中世文学集 1』白水社, 1990, p. 337. ただしドゥース写本では「八夜」.
- 28 Cf. ノルベルト・オーラー『中世の旅』藤代幸一訳, 法政大学出版会, 1989; 原野昇他『中世ヨーロッパの時空間移動』溪水社, 2004.
- 29 アタリ, ジャック『図説「愛」の歴史』大塚宏子訳, 原書房, 2009, p. 161.
- 30 Ferrante, J.M., « A frenchwoman in England writes for a Norman court: Marie de France », *A New History of French Literature*, Hollier (éd.), Harvard University Press, 1989, p. 54.
- 31 「妻の幽閉」は中世の他の作品にも現れる. 年齢差婚が多く, 夫の若妻への嫉妬や不安があったことが一因と考えられる.
- 32 富沢霊岸『イギリス中世文化史』ミネルヴァ書房, 1996, p. 72.
- 33 吉武憲司「アングロ・ノルマン王国と封建諸侯層 1066年-1204年」『西洋史学 177』1995, p. 12 より筆者が表作成.
- 34 Frappier, Jean, « Le Graal et la Chevalerie », in *Autour du Graal*, Droz, 1977.
- 35 浅治啓三 上掲書, pp. 47-48.
- 36 吉武憲司 上掲書, p. 15.
- 37 浅治啓三 上掲書, p. 20.
- 38 拙稿「西欧中世の文学と異邦人」『国際交流研究 1』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要) 1999, pp. 65-88 参照.
- 39 Thomas *Roman de Tristan*, Lecoy (éd.), Champion, 1991, vv. 82-89, 120-122 (Ms. Douce).
- 40 『フランス中世文学集 1』pp. 306-307.
- 41 Tobin, P.M.O'Hara, *Les lais anonymes des XIIIe et XIIIe siècles*, Droz,



---

1976.

- 42 Kinoshita, Sharon, « Colonial Possessions; Wales and the Anglo-Norman Imaginary in the *Lais* of Marie de France », *Medieval Boundaries*, Univ. of Pennsylvania Press, 2006, pp. 104-132.
- 43 Chrétien de Troyes, *Cligès*, Méla (éd.), vv. 31-39.
- 44 山代宏道「中世イングランドの多文化共生—「グローバルイズム」と「ローカリズム」—」『中世ヨーロッパと多文化共生』 溪水社, 2003, p. 21.
- 45 吉武憲司 上掲書, pp. 1, 10.
- 46 ウォルター・マップ 上掲書, p. 12.
- 47 高宮利行・松田隆美編『中世イギリス文学入門』 雄松堂, 2008, p. 262 (I-29「アングロ・ノルマン語の文学」).
- 48 デーヴィス, R. H. C.『ノルマン人—その文明学的考察』 柴田忠作訳, 刀水書房, 1981; 山代宏道「中世ヨーロッパの旅」『中世ヨーロッパの時空間移動』 溪水社, 2004, p. 15.
- 49 『ノルマンディー公の歴史』 *Estoire des Ducs de Normandie* (1175), 『トロイ物語』 *Roman de Troie* (1160-70 頃) の作者.
- 50 “Bretaine” の語はブルトン人が居住するブルターニュとブリテン島の両方を指すが, ここではナントが舞台なので前者.
- 51 「真実」の諸相については以下を参照. Geneviève Hasenohr, « “Dire la vérité”, “oir la vérité”: quelle vérité? À propos de quelques occurrences de vérité relevées dans les sermons de Gerson », *La transmission des savoirs au Moyen Âge et à la Renaissance 1*, E.N.S. Ed. 2005, pp. 13-28.
- 52 Wace, *op. cit.*, vv. 9751-54, 9761-68.
- 53 『フランス中世文学名作選』 白水社, 2013, p. 118 (原野昇訳『アーサー王の生涯』).
- 54 ウォルター・マップ 上掲書, p. 351.
- 55 Ménard, *op. cit.*, p. 20.
- 56 『十二の恋の物語』 上掲書, p. 288.